

浄教寺燈爐堂

〔京極通綾小路の北にあり、浄土宗知恩院に属す。四十八願巡の第四十三番なり。当寺初めは小松

内府重盛公建立にして洛東にあり、これを燈爐堂と号す、事は源平盛衰記に見へたり。後世洛中東洞院高辻にうつし、

天正年中又此地にうつす。鎮守は熊野三所権現なり。中興は立誉上人〕

本尊阿弥陀仏

〔春日の作、立像三尺許。脇士は観音勢至なり。仏壇内外の画図恵心僧都の筆なりとぞ〕

聖光寺

〔同街綾小路の南にあり、浄土宗一心院に属す。四十八願巡の第四十二番なり。開基良阿上人〕

本尊阿弥陀仏 〔立像三尺許。初は丹波国桑田郡篠村八幡宮の御本地仏なり。天正年中良阿上人八幡宮の霊夢を蒙り

こゝに安置す〕

清海曼陀羅

〔むかし蓮の糸にて織たる絹に、清水寺の観音化人と成曼陀羅を図して、和州の清海上人にあたへ給ふ霊

器なり。後世南都の絵師高天法眼が家に伝り、ある所当寺の良阿上人春日明神に詣し、かの法眼が宅に宿しぬ、法眼法

門を聴受し安心決定のうへ、此曼陀羅を上人に寄附せり〕

法然寺

〔京極五条坊門の北にあり、浄土宗知恩院に属す。法然上人旧蹟巡り二十五箇霊場の第十九番なり〕

本尊円光大師像

〔御自作、坐像二尺許〕 蓮生法師像 〔自作、坐像一尺許、当寺の開基なり。熊谷入道ある時旧里武州

熊谷に赴くの折から、安居院聖覚をして師の尊像を懇望す。師その深志を感じて自作の木像をあたへ給ふ。蓮生歡喜し、此尊像を負奉り東国を化益し、一寺を草創して熊谷寺と号す。其後九ヶ年を歴て上洛し、洛下に於て又一寺を建立して此影像を安置し、法然寺と号す。旧地は錦小路東洞院なり」

勅額〔極楽殿と書す、後伏見院宸筆、壇上中央に掲る。正安年中後伏見帝御不予の事あり。ある夜の御夢に沙門一人来り奏して曰、洛の東南に住す法然法師なり、願くば弥陀仏に帰入し念仏し給はゞ御惱安泰ならんと、謹んで白し忽然として見へず。御夢さめて後專信の念仏間断なし、然るに日を追て玉体安静にして竟に平癒まします。それより勅を下して王城の東南に法然上人の像を安置する寺院を尋させ給ふに、当寺より此旨を奏聞す。帝即影像を内裏に召さるに、夢の中の面貌に違はず、大に信感ましくて其時此勅額を賜ふなり」

空也寺〔同街五条坊門の南にあり、浄土宗知恩院に属す。四十八願巡の第四十一番なり。当寺の開基は空也上人にして、天禄三年の草創なり。極楽院空也堂と号す〕

本尊阿弥陀仏〔立像三尺〕空也上人像〔自作、立像二尺五寸。旧地は錦小路西洞院の西にあり、天正十九年こゝにうつす。今宗の祖見誉上人〕

乘願寺じやうくわんじ

〔空也寺くうやの南にあり、浄土宗一心院に属す。四十八願巡の第四十番。開基幼誉心空上人〕本尊阿弥陀仏〔西  
仏師の作、立像二尺七寸。露齒むかうばあらは見る、ゆへ世に齒仏はぶつと称す〕

徳正寺とくしやうじ

〔富小路通四条の南にあり、東本願寺に属す、初は東山大谷の辺にして勝久寺しょうきうじと号す、二条猪熊いのくまにあり、御  
城御造營の時今の地にうつす〕

本尊阿弥陀仏 〔安阿弥の作、立像二尺余。初は四条奈良物町大胆鍛冶だいたんかぢが持尊なり、靈告によつてこゝにうつす〕

〔寺説に曰、文明三年二月十六日、叡山えいざんの悪徒四五百人当宗の興盛を妬んで、大谷本願寺親鸞聖人しんらんの廟塔べうたふを破却せんと  
す。蓮如上人防に便なく、開山の影像を先立て密に遁れ、三井寺の別院近松寺に潜居し給ふ。時に越前国荒井あらゐの住人井  
上筑前といふもの、薙髮して願知と号す、是当寺の開基なり。此僧踏止つて身命を捨強く防戦ふ、故に山徒祖廟とそべうを発事  
を得ずして退散す。これによつて蓮如上人より感状を賜る。其文に曰、

願 知

今度本願寺依破滅山頭之悪党等開山上人之遺骨欲掘返一所依一身之才覚全御番仕不移転一条一世之満足末代之  
名譽神妙也為褒美内木仏令授与候也難有存子々孫々迄御廟所之御番可仕者也

文明八年正月十八日

蓮 如 在 判

勝久井かつひさのゐ

〔当寺の堂前にあり、細川兵部少輔勝久が第宅の旧跡にして其井水なり〕

〔当寺の什物に親鸞聖人の筆十字名号、後西院の宸翰六字九字の名号、親鸞聖人蓮如上人の遺骨、秀吉公朝鮮発向の軍鼓あり。○又毎年節分の初夜に平太郎入道真仏上人の伝を講読す〕